

# 勝鬘經宝窟の撰述について

三 桐 慈 海

一

隋の開皇年間、会稽の嘉祥寺に止住していた吉蔵が、やがて晉王広に招聘された諸徳の一人として、揚州の慧日道場にはいった。「慧日道場沙門吉蔵奉命撰<sup>①</sup>」との記述をもつ三論玄義が、この時期に撰述されたであろうことは、たとへ後期の加筆があったとしても、ほぼ認められ得るところである。それは撰嶺與皇相承の三論宗義が体系的にまとめられ、晉王広のもとに提出されたものと思われるのである。吉蔵にとって三論玄義の撰述は、江南の地のみならず都長安にまで、三論宗の宗義を明確に示したことになったと言えよう。ところで同じように「慧日道場沙門積吉蔵撰<sup>②</sup>」の記述をもつものには勝鬘經宝窟がある。この書が記述の

通り慧日道場において撰述されたものであるのか。またなぜ勝鬘經の注釈がここでなされなければならなかったのか。これらの問題を明らかにすることができるならば、そこに吉蔵の思想形成をたどることができるようと思われるのである。

吉蔵の著作活動は会稽時代に始まり、既に二諦義、大品經義疏、法華玄論、法華義疏が撰述されていたと考えられる。また揚州の慧日道場にはいつて早速に三論玄義が撰述されたに違いない。そしてそれに続くものとして、維摩經の注釈や金剛般若經などが取り上げられてもよいように思われるのであるが、記述を認めるならばそこに勝鬘經が選ばれたということになる。その理由を勝鬘經宝窟は序に次のように述べている。<sup>③</sup>

此經、言約義富、事遠理深。豈止勝鬘之一經、乃總方等之宗要。余、玩味既重、鏗鑽累年。摺拾古今、搜檢經論。撰其文玄、勸成三軸。

勝鬘經は言は約ではあるが意義は豊かであり、事理について深遠であるから、この一經に止まるものでなく大乘經の宗要を総括的に表わしている。そのような經典であるから、かねてより研鑽を続けてきたのだという。飾りことはの多い序文をそのまま受け取るわけにはいかないが、勝鬘經の注釈の中に仏教の主要を語ることができると考えたようである。そこで続く玄意五種を述べる中から、吉蔵が勝鬘經をどのように眺めていたかを、数項目取りあげてみたい。

衆經所以立名者、然至理無名、聖人無名相中、為衆生故假名相說。欲令衆生因此名相悟無名相。

多数の經典がそれぞれに説相を異にして説かれては、究極の理は言語で表現することを絶するものであるが、衆生にそれを悟らしめるために言語を仮りて表現するという。この文は中論觀四諦品の「諸仏依二諦、為衆生說法」の文と共に、吉蔵が經典を解釈する際の基本的姿勢を示すものとして、諸注疏のいずれにも見られるところである。この文型は法華玄論にも既に見られるもので、勝鬘經を注

釈するにあたってでも示されている。しかもこれが玄意の冒頭、名題を釈す最初に挙げられており、いかにも經典を解釈するにあたって、基本的な命題を大段に振りかぶったという感をぬぐいきれない。注疏のあり方を、この宝窟において典型的に示したいという意欲がみえるように思えるのである。經題を釈す中で五雙十義を挙げ、人法・法譬・体用・通別・理教の各一雙を列し、一雙が不二而二・二而不二の關係にあると説明する。これも形態を整えようとする方向をもつ。人法一雙とは、勝鬘という能説の人と師子吼以下の所説の法をさすとするが、維摩詰とその所説の法という維摩經の經題釈と関連させ得るであろう。また同じく法譬一雙は「師子吼」の譬と「一乘大方便方広」の法をいうのであるが、法華經の妙法と蓮華の關係の上にもみることができ、他の三雙もどのような經典にも言い得ることである。

夫道不孤運、弘之由人。斯乃法身大士、託質女形、隱迹後宮、和光同俗。欲弘風靡之化、故現妃后之形。仰請於仏、闡揚大教。是以須題勝鬘之人也。

と勝鬘夫人が法身の菩薩であることを述べている。この文は僧肇の維摩經序と並びに注疏に原型を見ることができ、即ち經序では「道不孤運、弘之由人」がみられ、注疏

では

維摩詰秦言浄名、法身大士也。其權道無方、隱顯殊迹。積彼妙喜、現此忍土。所以和光塵俗因通道教。常与宝積俱遊、為法城之侶。

とある。吉蔵にとって維摩詰も勝鬘夫人も共に法身の居士であり、大乘の教えをこの沙婆世界に闡揚するために現われたと説明する。法身は勝鬘経においても重要な課題として説かれているが、法華経寿量品を中心とする開近顕遠の法身、涅槃経の法身常住など、相互に関連させて論じられなければならない、宝窟の中で取りあげられている。

經題が示すようにこの經には、法身と共に一乗が説かれ、また「方広是大乘經之通名也」と積されるように大乘が説かれる。明宗旨門において、「此經、章雖十五、統其旨趣、以一乗為宗」と勝鬘経が一乗を明かす經であることを論じて、そして法華経との間には広略有無の差があるとして、一乗については法華経は広説し、勝鬘経は略であるという。また有無については、勝鬘経には二死五住が説かれるが法華経には説かれない。法華経には三会と種々の権実が説かれるが勝鬘経には見られないなど、多くをあげることができるといふ。また法華経は廻小入大の人のために説かれたが、この經は直往菩薩のために説かれたなどの相違を挙げ

ている。

玄意にはこの經が一乗を正宗とすると述べるが、經文を積すところでは仏性・如来蔵を解説し、四諦を説明している。これらは大般涅槃経と共通の課題となる。涅槃経如来性品には法身の常樂我浄が説かれ、一切衆生悉有仏性が主張されて如来微密蔵に言及されている。また如来性品や聖行品には、四聖諦が大乘においてどのように理解されるべきかが説かれている。このようなことからするならば勝鬘経には、維摩経や法華経・涅槃経に説かれている重要な課題が収められていると考えたように思われるのである。

## 二

「一乗者即是第一義乘」までの經文は、宝窟において一乗章と名づけられて、その前の積撰受正法章と関連させながら一乗三乗が論じられてきた<sup>⑨</sup>。これを一乗行を明かすもので、撰受正法における広大への出生と、一乗における無二への收入という、出生と收入のはたらきとして領解している。この一乗行に対してこれより後の釈無辺聖諦章よりは、一乗の理として四聖諦が説かれることになる。これは勝鬘経に「声聞縁覺の初めて聖諦を觀ずるは一智をもって諸住地を断ず。一智と四断智と功德作証とをもつて、

また善くこの四法の義を知る」ということと、「声聞縁覚の無明住地を断ぜざる初めての聖諦智は、これ第一義智に「あらず」との間に、「聖諦とは声聞縁覚の諦に「あらず」という問題が提起されたことによる。これを吉蔵の釈に語らせるならば、

仏法大事、所謂四諦。如来出世、初転四諦法輪。小乘之人、執為究竟。今欲破之、明昔說四諦、此是不了義說。無量四諦、是了義說。令彼小乘識無量諦、更知苦、断集、証滅、修道、得成仏也。

ということになる。四聖諦が聖諦と言い得るのは、無明住地を断じた第一義智においてであって、四聖諦とは本来そのような意味において成り立つものであるのに、苦集滅道の語に執着を起して、それを究竟と思ひ込むところに誤りを犯すことになる。このような四聖諦の理解の仕方は、大般涅槃經においてより具体的に示されている。如来性品第四<sup>⑫</sup>では「善男子、言う所の苦とは聖諦に名づけず。何をもつての故に。もし苦はこれ苦聖諦と言わば、一切牛羊驢馬および地獄の衆生も、まさに聖諦あるべし」として「如来常住にして変易あることなき」ことを理解し苦を修すれば苦聖諦と言い得るとし、同様に集滅道の上にもそれぞれに聖諦であり得るような理解の仕方を示している。また同じ

く聖行品でも菩薩が大乗大般涅槃に住して四諦を觀察する時、はじめて四聖諦となり得ることを説いている。吉蔵はこれらの經典によって、四諦そのものは、二乗に属するものではなく仏にのみあり、一乗が仏果であれば四諦は仏の所証であるから、ここに一乗の行に対する一乗の理として、四諦が説かれると解するのである。また一乗を成就するのは仏性を見ることによるのであるから、一乗の果は如来蔵に依つて得られ、その如来蔵は四諦によって顕わされることになると、審実不虛の聖諦の意味を明らかにしている。

それでは小乗における四諦の意義はどのようなことになるのだろうか。第五約人門<sup>⑬</sup>において次のようなことが述べられている。凡夫には苦と集の二種があるけれども、気付かないから諦が無いのと同じことになる。ただ滅ということは断惑が成立さえすればあるといえる。また道諦は一向にないとする。それに対し声聞には苦があつて、苦のありようが量り知られることから諦といえる。しかし大乘正觀の上に見たものではないから真実ではないことになる。真実でないものを諦と言い得るかどうか。これには勝鬘經に「無作の聖諦の義」が「能く自力をもつて、一切の受の苦を知り、一切受の集を断じ、一切受の滅を証し、一切受の滅道を修す」のに対して「作の聖諦の義」は「他に因るは能く一切

苦を知り、一切集を断じ、一切滅を証し、一切道を修する、

にはあらず」とされることによって示されている。すなわち苦集滅道を他によって知ることが領解ではない、と知らせるために示された四聖諦であるとする。凡夫には苦があつてしかもそれを知らない。そのために苦であることを知らせるための教えが示される。その教えによって苦であることを知つた声聞は、苦が真実であると思ひ込んで、教えに執着をおこしている。そこでそのような思い込みの苦は苦聖諦とは言えないと教えて、無量四諦を示し仏道に向わしめる。吉蔵はこのような經典の説相を受けて、第七料簡門に四諦中の道と菩提道の関連による行道を示す。四諦中の道は以上のような領解から小乗ではなく、大乘における因道である。因道であれば無常である。無常であるから、苦の原因となる集諦が明らかになり、それによって苦諦が明瞭になる。道諦が因行となつて滅諦の果が明らかになる。このような行道が無上菩提であり果道である。そして無上菩提において、道としての因道とその果道とが、因果不二として完成することになる。

宝窟に釈説一諦章第十と分科せられている経文は、「世尊、この四聖諦は、三はこれ無常、一はこれ常なり」と説かれている。これに対し来意門において吉蔵は次のように

釈している。

已論昔諦非究竟、今無量究竟。今就無量諦中、自簡三非究竟、一是究竟。故有一諦章来。又欲明仏教大宗舒卷之仏法。広説則八万四千。撰八万四千在於八諦。次撰八諦唯成一四諦。雖有四諦終歸一諦。唯此一諦是其真実。对多是故言一。若帰一諦、則無復多。無多亦不可言一。

すでに「作の聖諦の義」が「有量四聖諦義」で究竟ではなく、「無作の聖諦の義」が「無量四聖諦義」で究竟であるとして、有量四諦が否定されるべき相として示されてきた。したがつて吉蔵は、滅諦は常であり他の三諦は無常であると説く勝鬘經の説を、無量四諦の域内での課題であると限つて、その域内を出生と收入のはたらぎの場として理解した。八万四千の法蔵が有量無量の二種の四諦に撰められ、二種の四諦が一種にまとめられ、四諦の中で多と一の關係において一に帰せしめる。一は言辭相寂滅をあらわす。しかし吉蔵は一応は経文に随つて解釈はしたものの、無量四諦の領域において、一を常とし三を無常と區別するだけでは不十分と考えた。そこで「然してもし通じて理についてこれを論ずれば、則ち四諦は同じく真如に入り、故に悉く名づけて常となす。これはこれ差別の無差別の義なり。も

し無差別の差別なれば宜しく四句を開くべし」という。そして苦集二諦は無常、滅諦は常であり、四諦中の道諦は因道であって無常、仏果の道は常。これらのすべてを泯して一相に帰せしめれば、言忘慮絶で常と無常を説くことはなくなる。吉蔵の通途の論理をもちこんで説明をするのである。経文には、吉蔵が解説するような領域の設定や帰一の論理が、直接にあるわけではないが、経文解釈という手段を通して、主張したいことを強調しているようである。

続く勝鬘經<sup>⑮</sup>の文に「顛倒の衆生は、五受陰において、無常に常の想あり。苦に樂の想あり、無我に我の想あり、不淨に淨の想あり」と示される。これと同じ内容ではないが、先に引用した涅槃經如来性品の四聖諦修習が説かれる後に、四倒が説かれる。「善男子、四倒と謂うは苦にあらざる中において苦想を生ずるを、名づけて顛倒という。苦にあらざるは名づけて如来となす。苦想を生ずるは、如来において無常変異すと謂う。もし如来はこれ無常と説けば大罪苦に名づく」とし、「無常に常想、常に無常想なる、これ顛倒と名づく」などと四倒を説明している。涅槃經では法身の常樂我淨が主張せられ、それは声聞が無常・苦・無我・不淨の教法に執著を起しているのに対して、その執著であることを知らせるために法身の常樂我淨を説くとされてい

る。また凡夫の四倒は、もともと無常であるのに顛倒して常と思ひ込んでいる、我見によるものであることが説かれる。勝鬘經の無常に常の想ありとは、涅槃經の凡夫の四倒である。そして続く勝鬘經の文「一切の阿羅漢辟支仏の淨智は、一切智の境界及び如来の法身においては、もと見ざる所なり」は、涅槃經における、法身の常樂我淨が見えない声聞と同じである。吉蔵が宝窟において、我・無我の關係を四種列挙しているのは、勝鬘經と涅槃經の兩經の常樂我淨の説相を、対照しながら考察した上でのことであると思われる。その四種の我無我を挙げてみると、一に解惑二情に就いての相對。生死の有我と涅槃の無我で、一般通情において考えられる我と無我である。我に執著するから世間に生を受けるのであり、それで我ありという。それに対して我を離れて生じないようにし涅槃を証せしめることを無我という。二に、法相の虚実<sup>⑯</sup>に就いての相對。生死の無我と涅槃の有我で、法相の上のみられるものである。生死の世界は虚誑不実で自在ではなく、そこには真実はなく無我である。それに対して涅槃の世界は真実で八自在を具へ、真実の有我である。三に如理に拠って二俱に無我。道理として凡夫の我も空であり諸仏も空である。生死の法は空であり涅槃も空である。我空も法空も共に無我であるから、

道理として生死も涅槃も無我である。四は、仮用と実と就いて、生死と涅槃の二が俱に有我である。生死の有我とは、世諦仮名の我で五陰仮和合の我と生死中の実性の我で如来藏性を意味する我である。これは空性の上に見た我と悉有仏性の面より把えた我である。また涅槃の我も、諸徳和合の報身仏における仮我であり、今一つは法身における仏性の我である。両經の説相をまとめると、無我であるのに我に執著して、しかも我に執著していることに気付かない。無我であることを示して、我に執著していることを知らしめ、無我であることを理解させる。教の無我に執著している者に法身の我を説いて、執著を知らしめる。そこに法性の空を示す無我と、その無我を体得する主体ともいふべき仏性の有我とを明確にしているのである。

## 三

勝鬘經宝窟を論ずるならば、法身や如来藏に言及しなければならぬのであるが、ここでは四聖諦を中心に検討してきた。この經には積一乘章と分科される場所もあり、一乘三乘の問題も論述されている。また法華經疏に詳述をゆずったところもある。法華經方便品には、声聞には四諦を、縁覚のために十二因縁を、そして菩薩のためには六度をと

説かれているが、釈無辺聖諦章では經文の「声聞縁覚初觀聖諦」に関連させて、縁覚がなぜ四諦を觀するのかという質疑を設定している。このようなことから、吉藏は法華經と勝鬘經の関係が深いことを、かなり強く意識しているように思われる。涅槃經についても先に述べた通りである。それを宝窟の四明教不同の中で、教門不同を明かして次のようにいう。

南土の人云く、教に三種あり。一に頓教、二に漸教、三に無方不定教なり。頓教は華嚴の流をいう。漸教は鹿苑に趣くより涅槃に至る、五時次第してこれを名づけて漸となす。三は無方の教。前の二種の外、即ち勝鬘經これなり。故にこの經は小品を過ぎ、法華を包み、涅槃と極を齊しくす。一乘をもつて体となすといえども、顯して常住を言う、故に涅槃と理同じぎを得る。一体三帰を説くといえども、一乘をもつて致となす、故に法華の説を包む。既に義は兩教に適う、故に無方に属す。またこれ別に機に応じ、雙林の説にあらず、故に涅槃に異にす。

勝鬘經の説時が五時説に適応しない無方教であるが、そこに説かれる内容は小品・法華・涅槃などの諸經と共通している。無方教とされているものに楞伽經や法鼓經がある

が、兩經は勝鬘經の前後に位置づけられるものである。それに勝鬘經は廻小入大の菩薩ではなくて、直往の菩薩に説かれたものであるという。教門不同を明かす中で、この經の評価をこれだけ挙げるならば、諸經典の中でいかに重視しているかが察せられる。吉藏は南土の三教五時説や北土の五時四宗説を、用いる所にあらずという。そして經論の誠文に見られるところであるから、声聞藏と菩薩藏の二藏は用いるが、衆生が二藏を聞いて大小の二心を起こすようであれば、非大非小であることを了悟させねばならないという。南土の三教は今はいないというのであるから、勝鬘經を注釈するということが、無方教の一つとして選ばれたのではないであろう。しかし「慧日道場沙門胡吉藏撰」の記述をもつ著書に華嚴遊意がある。この書の記述をどこまで認めるかは、十分な検討をなし得ない今、この兩經の関連に言及することはできない。しかしもし南土の三教ということを使う時、漸教の中では法華經を、頓教の華嚴經と無方教の中の勝鬘經をという、三經をもつて代表させて注疏を著わそうとした、そのような意図を推測することはできないであろうか。もっとも華嚴遊意を如何に遊意であるとはいえず、他の注疏と比肩できるものとは思えない点がある問題ではある。

宝窟の冒頭に無名相中、仮名相説の文があることは、その前に玄義のあることが予想されてよいであろう。吉藏が慧日道場に入って最初に著わしたのは、命を奉じて撰述した三論玄義であった。そして經の注疏として勝鬘經が選ばれた。この經は摂受正法という仏教のもっとも基本的な課題から、如来藏という大乘の根源的な課題にまで、説述内容が展開されている。内容としては一乘・法身・如来藏などの大乘思想はもとより、三法印や四諦などの基本的な課題が、大乘思想の視点を通して論じなおされている。維摩經と同じように經典の中心人物が勝鬘夫人である。經典はあまり大部のものではない。これらの理由が宝窟成立の上に考えられるように思われる。既に会稽において法華玄論と法華義疏を成立させていた。それは既に廻小入大の人々に一乘三乘を論述してきたことになる。今は直往の菩薩に一乘を説明すればよい。しかも廣大出生と無二への收入という両面のはたらきを、經典自体がそなえている。それが四聖諦の中の究竟である滅諦と、非究竟である苦集道の三諦の関係を、無量の聖諦の内ではたらきと解釈することになり、そこに吉藏の般若思想も現われているように思われるのである。

註

- ① 三論玄義 (大正 45・1 a)
- ② 平井俊栄『中国般若思想史研究』(春秋社一九七六年) 三五四頁
- ③ 勝鬘經宝窟 (大正 37・1 c)
- ④ 拙稿「法華玄論の撰述について」(仏教学セミナー第 31 号・一九八〇年) 21 頁
- ⑤ 注 3 に同じまた (2 a) まで。
- ⑥ 法華玄論卷第一「蓋は無名相中、仮名相説、欲因仮言令悟無言耳」(大正 34・362 a)
- ⑦ 勝鬘經宝窟卷上本 (大正 37・2 b)
- ⑧ 注維摩詰經序并卷第一 (大正 38・327 a・c)
- ⑨ 勝鬘經宝窟卷下本 (大正 37・63 b)
- ⑩ 勝鬘獅子吼一乘大方便方廣經 (大正 12・221 a)
- ⑪ 勝鬘經宝窟卷下本 (大正 37・63 c)
- ⑫ 大般涅槃經、如來性品第四之四 (大正 12・406・b)
- ⑬ 同、聖行品第七之二 (大正 12・434 c) など参照
- ⑭ 勝鬘經宝窟卷下末 (大正 37・64 a)
- ⑮ 右に同じ (大正 37・75 a)
- ⑯ 勝鬘經 (大正 12・222 a)
- ⑰ 大般涅槃經、如來性品第四之四 (大正 12・407 a)
- ⑱ 勝鬘經宝窟卷下末 (大正 37・77 c)
- ⑲ 勝鬘經宝窟卷上本 (大正 37・5 c)

(本学教授 仏教学)